# Eternal Star 3

綾瀬麻結

目　次

Eternal Star 3　5

マイ、スイートラブ　269

Eternal Star 3

# プロローグ

――大阪、八月。

鈴木千佳は流れる景色を眺めていた。外は茹だるような暑さだが、新幹線の車内はエアコンが効いていて、涼しい環境が保たれている。

だが、千佳の躯は異常なぐらい火照っていた。その瞳は潤み、頬には幾筋もの涙の跡がある。

東京を離れることにためらいはない。快適だった一人暮らしをやめるのも、東京本社から大阪支社へ出向するのも自分で決めたことだから。

だが、たった一つだけ残念で堪らないことがある。数週間前まで付き合っていた水嶋優貴と、出発前に会えなかったこと。彼に別れを告げられたが、何故、優貴に相談もせず一人で大阪へ行くことを決めたのか、もう一度だけ会ってきちんと説明をしたかった。

二人の未来は、再びどこかで繋がると信じている。だからこそ、優貴と会ってから東京を発ちたかったのに、それは叶わなかった。

千佳は、どうやって希望を持てばいいのかわからなくなっていた。

同じ秘書室で働く同僚で、ずっと仲良くしてくれていた桜田に全てを話した時には、千佳の気持ちも前向きになっていたというのに。

想いを押し込めるように唇を引き結ぶものの、すぐにわなわなと震え出す。膝に置いた手には自然と力が入り、いつの間にかギュッと拳を作っていた。

千佳は、妹の実佳が突然訪ねてきた時のことを思い出していた。

（わたしは、知らなかった。何故、実佳がたった一人で東京へ来たのかということを。目の前の問題しか見えていなかったから、気付いてあげることもできなかった……）

両親が入院してしまい、実佳はたった一人でどれだけ心細かったことだろう。

だから、罰が当たったのかもしれない……。優貴以外の男性にときめき、結果、恋人を失うはめになった。

大阪へ向かう新幹線の自由席。自分の愚かさに、千佳はたった一人で涙を流していた。

# 第一章　そして、タカラが零(こぼ)れ落ちた……

「じゃ、行ってくるね」
今日から、水嶋グループ大阪支社での仕事が始まる。初日ということもあり、千佳は家を出る時から少し緊張していた。
「千佳……、ご飯ぐらい食べていったら？」
ご飯と聞いただけで、胸がムカムカしてきた。吐き気さえ覚える。それを極力無視してハイヒールを履き、スカートについた埃を払うと、千佳は上がり框(かまち)から腰を上げた。ゆっくり振り返って、心配そうに見つめる母へ視線を向ける。
「ごめんね。食べた方がいいのはわかってるんだけど……まだ胃の調子がおかしいみたい」
千佳は、軽く胃を摩(さす)りながら顔をしかめた。
「病院へ行ったら？　ちょっと……長すぎるわ」
「うん。だけど……理由はだいたいわかってるの。東京を出る前から、体調が悪かったし」
母は、千佳が優貴と別れたことを知っている。大阪へ着いてから何気なく優貴のことを訊(き)かれ、千佳は素直に別れたと告げたからだ。
どうして別れたのか理由は訊(き)かれなかったが、その影響で千佳の体調が優れないと薄々感じ取っているのだろう。だから、この日も曖昧に答える千佳を追及しようとはしなかった。
「それなら、これを持っていきなさい」
母が差し出したのは、スパウト付きパウチだった。手軽に栄養補給ができるゼリーが入っている。時間がない時は食事代わりにもなるので、千佳も東京では重宝していた。
「ありがとう、お母さん」
母の愛情を感じながらそれをバッグに入れると、千佳は面を上げて背筋を真っ直ぐに伸ばした。
「じゃ、いってきます！」
「いってらっしゃい。気を付けてね」
「お姉ちゃん、いってらっしゃい！」
ダイニングルームで朝食を取っている実佳の声が、玄関まで聞こえた。母と目を合わせて笑みを交わすと、千佳はドアを開けた。
外に出ると、日射しが容赦なく降り注ぐ。その眩しさに、千佳は思わず目を細めた。蝉(せみ)の鳴き声も朝から元気なので、今日もいい天気になるのだろう。
今日から始まる新しい仕事に向き合うために、千佳は大きく深呼吸を三回繰り返した。
「よし！」
気合いを入れて自分を奮い立たせると、そのまま駅に向かって歩き出した。
「鈴木千佳です。皆さんにご迷惑をおかけしないように頑張ります。いろいろとご指導よろしくお

願いします」
これから共に働く秘書たちの前で挨拶すると、温かい拍手で迎えられた。
それからの数日は、秘書室内での動きを頭に叩き込んだ。いろいろと親身になって教えてくれたこともあり、何とか一日一日を過ごすことができた。
そんな時、本社社長に初孫が誕生したというビッグニュースが社内を駆け巡った。
（亜弥さんと康貴さんの赤ちゃん、無事に生まれたのね。良かった！）
優貴の弟である康貴と、その妻の亜弥に、千佳は心の中で何度もおめでとうと告げた。
初孫が誕生したことを受け、大阪に住む康貴夫妻のもとに、水嶋一族が総出で訪れるという噂が千佳の耳に入った。
もしかしたら、その時に優貴も大阪支社に顔を出してくれるかもしれない。
少し心を弾ませたが、結局顔を出したのは本社社長だけだった。
まだ、優貴に避けられているのだろうか？
そう思うとショックだったが、千佳はあまり深く考えないようにした。気持ちを切り替えて、亜弥のことを考える。
（九月に入ったら、わたしが大阪へ来たことを告げよう。数ヶ月前に会って以来、亜弥さんにはずっと連絡をしていなかったし）
そのことを忘れないようにするために、机の引出しに臨時に発行された社内報をそっと入れた。
社内報で水嶋家の近況を垣間見ることができたからか、千佳はほんの少しだけ幸せな気分に浸れた。
だが、すぐに気を引き締めると、千佳は仕事モードに切り替えた。
それ以降、仕事場では仕事を、家に帰れば家族のことを第一に思って行動をした。一人っきりになると、優貴のことを思い出して涙する。人目も憚らず、新幹線の中で涙を流したのが引き金となっているのかもしれない。
（感情が昂ぶってるのかな？　優貴に別れを告げられてからというもの、わたしの体調も精神状態も不安定だし……）
家族が、千佳のことをとても心配していることはわかっていた。だからこそ、無理をしてでもいつもの自分でいるように心懸けていた。

――九月。
いつの間にか八月も終わり、長い夏休みを終えた学生たちと電車で顔を合わせるようになった。
千佳の体調は悪くなる一方だというのに、時間だけはどんどん過ぎていく。体調管理すらできない自分を不甲斐なく感じながら仕事をしていたが、そんな千佳とは裏腹に、社内の雰囲気が少し活気づいているような気がした。
それとなく耳をすますと、大阪府岸和田市で毎年秋に行われる岸和田だんじり祭の話題で盛り上がっているようだ。岸和田だんじり祭は約三百年の歴史と伝統を持ち、日本を代表する祭の一つとなっている。町会の青年団に属している社員もいるので、毎年この時期は社内も賑わうらしい。

だが、特にその話題に加わることもなく、千佳は今までと変わらない生活を送っていた。
親しくしている社員もいなかったので、この日も千佳は一人で社員食堂へ向かった。
相変わらず食欲がないまま無理をして食べ物を口に入れていると、いきなり誰かが目の前のテーブルに乱暴にトレイを置いた。ガシャンと食器がぶつかり合う音にびっくりして、千佳は面を上げる。
そこには、茂庭(もにわ)が立っていた。今年の春、千佳に告白をしてくれた男性だ。
彼と一緒にいたことが優貴の誤解を招き、最終的には別れることになってしまった。優貴が茂庭の存在を過剰なほど気にしていたことを知りながら、勝手に茂庭もいる大阪へと行くことを決めてしまった。そのことも、別れを告げられた原因の一つかもしれない。
その茂庭が、今は千佳の目の前に立って怒ったように睨んでくる。千佳と視線が絡まり合うと、何の断りもなく向かいの席に腰を下ろした。
「茂庭、さん？」
「俺、怒ってるんですよ」
彼は、Aランチのスタミナ定食を食べ始める。以前、東京で食事に誘われた時とは違って、豪快にご飯を頬張る姿に、千佳は思わず男を感じた。
性欲を刺激する〝男〟ということではない。その食事の量や、お腹を満たして午後からも仕事に励もうと頑張っている男の姿を見て、自然とそう思ったのだ。
千佳が呆然としていることに気付いたのか、彼は諦めに似た面持ちになった。口の中の物を全て呑み込んでからテーブルに手をつき、千佳の方へ近寄るように前屈みになる。



「俺が何を言っているのかわからない？　三ヶ月前、一緒に食事をしようと誘って段取りまでしていたのに、鈴木さんは急に東京へ戻ってしまった」
(そうだった。あの時は、茂庭さんと一緒に食事をするのは良くないと判断したのよね。彼の誘い方が強引だったのもあるけれど、わたしは優貴だけを見つめたいと思ったから)
「……ごめんなさい」
あれからまだ三ヶ月ほどしか経っていないというのに、千佳には遠い昔のことのように思えた。
(わたしは、茂庭さんから逃げるように名古屋へ向かって、そして優貴と会って……)
そこで過ごした濃厚な時間を、千佳はふと思い出してしまった。すぐに瞼(まぶた)をギュッと閉じて、その光景やこの身が覚えている官能を振り払おうとする。
「それじゃ、俺のために時間を作ってくれますよね？　本社から来た俺たちは、似た者同士なんですから」
その言葉にパッと目を開けて、千佳は彼を探るように見つめる。
似た者同士とは、どういう意味なのだろうか？
千佳は出向という扱いだが、茂庭は少し違う。茂庭は優貴によって左遷させられたのだ。それでも、二人の境遇は東京から来たという点については似ているかもしれない。
「茂庭さんは、どうして知ってるの？　わたしが大阪へ来たって」
「ああ、本社から来たっていうだけで、一瞬でいろいろと噂が」
茂庭は、箸で食堂にいる社員たちを指す。

「鈴木さんが……俺のところへ来て、大阪支社勤務になったことを知らせてくれるのをずっと待ってた。でも、一向に何も言いに来てくれないから、業を煮やしたってわけで……」
そこで茂庭は一旦言葉を止め、少ししてから再び口を開いた。
「鈴木さん、食べないんですか？」
ちょっとしか手をつけていない海鮮リゾットに視線を落とし、千佳は軽く頷いた。
「最近、食欲なくて……」
ずっと気になっている下腹部付近を、そっと手で撫でる。優貴に別れを告げられてから、千佳は食欲不振に陥り、胃のむかつきがおさまらなくなった。おそらく、心が不安定だから、躯の調子もおかしいのだろうと思っていた。
だが、最近は突然下腹部が張ってキリキリと痛むことがある。ただの神経性だと言われそうな気もするが、ここまで不調が長引くのであれば、早めに病院へ行った方がいいのかもしれない。
（生理中でなければ、すぐにでも病院へ行くんだけど……）
躯の不調が続くのに食欲が出るはずもなく、千佳はそっと皿を押した。
「まだ胃に優しいリゾットなら食べられるかなって思ったんだけど、やっぱりムカムカして食べられそうにないみたい」
「それじゃ、今週の土曜に美味しいものを食べに行きましょう！　胃に優しいものを探しておきますから」
楽しそうに微笑む茂庭を見て、千佳も口元を緩めた。



彼のことは恋愛対象として見られないが、この率直な話し方は好きだった。
（優貴のことを諦めたわけではないけれど、今のわたしには……こういう環境が必要なのかもしれない）
「ええ、行くわ」
「よっしゃ！」
躯で喜びを表現する茂庭を、思わず優貴と比較していた。優貴は、こんな風に喜びを表に出すことはなかった。傍目にわかる感情といえば、怒りだけ。
千佳の口は、自然とへの字になる。
（そういう優貴を怖いと思ったこともあったけど、それでも彼を愛さない日はなかった。ねえ、優貴。あなたは？　あなたは……もうわたしを愛していないの？）
親密そうに茂庭と話す千佳を、社員食堂の入り口から一人の男性が見つめていた。
他の社員と同様にスーツの上着を脱いでいるが、その顔を見れば一目瞭然。水嶋グループ会長の孫の一人で、本社社長の息子でもある水嶋康貴が千佳を眺めていた。
「……ちょっとヤバイんじゃないのか？　優はいったい何をしてるんだ？」
康貴がボソッと呟いたが、その言葉は誰にも聞こえなかった。もちろん、千佳の耳にも届かなかった。
午後、千佳は頼まれた出張資料を手にエレベーターに乗り込んだ。

仕事をしていれば、他のことを考えなくてすむが、一人になると優貴のことが自然と頭に浮かんでくる。
千佳はそっと瞼を閉じて、脳裏に焼きついてる優貴の顔を思い浮かべた。口数の少なかった優貴だったが、態度で瞳で愛情を示してくれた。
（もうあんな目で、わたしを見つめてはくれないの？）
その時、いつもと同じように下腹にチクッと痛みが走る。
「……っあ！」
そっとお腹に手を置いて、軽く摩る。胃のむかつきに食欲不振、そしてこの下腹部の痛み。これは異常かもしれない。市販の薬を服用しているが、痛みがひく気配はなかった。生理痛のような痛みが断続的に続くなんて、今まで一度も経験をしたことがない。
千佳は、茂庭との約束を変更してもらい、土曜日に病院へ行こうかと考えた。
だが、前回、約束を破り、逃げるように大阪を後にしたので、今回は自分から変更を言い出したくなかった。
（絶え間なく痛むわけではないから……大丈夫、よね？）
エレベーターを降りると、千佳は土地開発部へと向かった。
「失礼します。秘書室の鈴木ですが、土屋課長はどちらにいらっしゃいますか？」
入り口近くのデスクに座る男性に訊ねる。
「ああ、たった今急いだ様子で一階へ行きましたよ」



（一階へ？　十四時までにこの資料を届けるようにと言っていた土屋課長が？）
「すぐに戻ってこられます？」
「どうだろう？　そのまま会議室へ直行するかもしれないな」
千佳は、顔をしかめた。時間を指定してきたということは、今日必要な書類ということになる。もし時間までに渡せなければ、きっと大変なことになるだろう。
土屋課長を、一階で捕まえた方がいいかもしれない……
「わかりました。わたしも一階へ行ってみます。もし、行き違いになりましたら、秘書室の鈴木が来たと伝えていただけますか？」
彼が頷くのを見てから、千佳は急いでその場を後にした。
エレベーターのボタンを押すと、タイミングよく扉が開く。それに飛び乗ると、一階のボタンを押した。
（どうして土屋課長はわたしの約束を放り出すほど急いでロビーへ向かったの？）
扉が開くと同時に、千佳はロビーに向かって歩き出した。周囲を見回し、目的の人物を探す。窓際に置かれた応接セットには、それらしき人物はいない。観葉植物の陰にも、奥に設置された小型ロッカーのところにも。
キョロキョロと見回しながら、千佳は中央にある受付カウンターへと向かった。歩いていくにつれ、受付の女性の姿が大きくなってくる。エントランスが見渡せる場所まで来たところで、千佳の足はピタリと止まった。

「えっ!?」
心臓がドクンと跳ね上がる。
（嘘……。あれは、優貴っ!?）
千佳の足は、床にピタッと張りついたように一歩も動けなくなった。
突然のことに胸が痛くなったが、優貴が表情を和ませて誰かと話している姿を見た途端、胸がトクントクンと早鐘を打ち始めた。心だけでなく躯も彼を愛していると知らせるように、千佳の躯がどんどん火照っていく。
（あれは、絶対に優貴よ。弟の康貴さんではないわ。わたしの心が、躯が……あれは優貴だと告げている！）
優貴に別れを告げられて以来、こんなにも幸せを感じたことはなかった。千佳は目をキラキラと輝かせ、口元を綻ばせながら優貴を見つめ続けた。しかも、探していた土屋課長が、優貴の側にいる。
（土屋課長に資料を渡すために、優貴の側にいける！　もしかしたら、優貴から声をかけてもらえるかもしれない！）
胸の高鳴りを抑えきれないまま一歩前へ踏み出そうとした途端、土屋課長が少し立つ位置を変えた。愛しい人に会える喜びで、幸せそうに微笑んでいた千佳の表情が、一瞬にして凍りついた。
（……えっ？）
見たことのある女性が優貴に腕を絡ませて、ぴったりと寄り添っていた。優貴はそれを嫌がりもせず、千佳にもあまり見せたことのないような優しい笑みをその女性に向けている。



優貴の隣にいる女性は、千佳も名古屋で会ったＨＫコーポレーションの宝来夏希。優貴を狙っているとホテルの化粧室で宣言していた光景が、すぐに千佳の脳裏に浮かぶ。
（胸が痛い。……お腹もキリキリと痛い！）
千佳は、ブラウスの胸のあたりをギュッと片手で握った。ドロドロとした醜い嫉妬が、千佳の躯の中に湧き起こってくる。
「……っ！」
悲痛な呻き声を漏らしながらも、千佳は恋人同士にしか見えない二人から目を逸らすことができなかった。
名古屋では、優貴は夏希を取引相手の一人として扱っていた。
だが、今の優貴は全く違っていた。普通なら人目のある場所で、あんな風に堂々と女性に腕を絡ませるようなことはしない。
にもかかわらず、夏希の腕を振り解かないということは、つまり二人の関係は……
その時、土屋課長が千佳の方へ歩き出した。続いて、優貴と夏希も歩き出す。
優貴はまだ千佳の存在に気付いていなかったが、側にいた優貴付きのアシスタントの柳原が千佳の姿を認めたようだった。柳原が何かを耳打ちすると、優貴の躯が一瞬で強ばる。触れ合っている腕から異変を感じ取ったのか、夏希が窺うようにチラッと優貴へ視線を向けた。
「ああ、鈴木さん！　すまなかったね。ロビーまで持ってきてくれたのかい？」
「……はい」

脂汗が額や背中を流れるのを感じながら、千佳は土屋課長の方へ躯を向けた。面を上げられず、足元から五十センチほど離れた床をジッと見つめる。
千佳の足は床に張りつき、思うように動けない。しかも、拒絶反応を示すように、躯のあちこちが悲鳴を上げていた。
「どうしたんだい？　何やら、具合が悪いようだが……」
「いえ、大丈夫です。あの……これ、全て中に入っております」
千佳は、どうにかして課長に封筒を差し出すことができた。
「ありがとう、本当に助かったよ。それじゃ、また何かあったら秘書室に連絡を入れるから」
「……はい」
千佳は、ぎこちない動作で深々と頭を下げた。
目の前を土屋課長の足が通り過ぎ、続いて優貴の足とピンヒールを履いた夏希の足が視界に入る。
（優貴！　お願い、一言でいいから……わたしに声をかけて！）
そう願ったのに、優貴はためらうこともなく千佳の横を通り過ぎていった。
ガタガタと震える躯を抱き締めたい思いに駆られたが、千佳はそれを堪えてゆっくり頭を上げた。
「鈴木さん、本当に大丈夫？」
そこには、心配そうにこちらを見る柳原がいた。
東京では、優貴に会わせてと、何度も柳原に詰め寄った。だから、彼は全てを知っている。優貴と千佳は別れたが、それは合意の上ではなく、千佳が一方的にフラれてしまったのだと。



それもあるから、愛する男性が他の女性と仲睦まじくしている姿を見て、千佳がショックを受けていると思ったのだろう。
（もし、こうやってわたしを心配してくれたのが優貴だったら……）
「……はい」
か細い声で、千佳は応えた。
「柳原！　何をしてる！」
優貴の怒号が、ロビーに響き渡る。
「行って、ください。早く……」
懇願するように千佳は囁いた。それでも柳原は心配そうに千佳を見つめていたが、再び優貴の怒号が響くと踵を返して足早にエレベーターホールへと向かった。
それから何分経っただろうか？
優貴たちが去ってからも、千佳はずっとその場に立ち尽くしていた。断続的に襲ってくる下腹部の痛みに顔をしかめて、そっと汗を指の腹で拭う。
その時、再び爆弾が千佳を襲った。
「さっき、次男の横にいた女性が……もう一人側にいた年配の男性に話していたのを聞いちゃったんだけど、近い将来、もっと顔を合わすようになるって言ってたわよ。次男と一緒に挨拶に伺うとか。それって、結婚よね」
受付の女性の言葉が凶器となり、千佳の頭を思い切り殴りつけてきた。あまりの痛さに、目の前

がチカチカする。さらに、耳の奥ではガンガンと音が反響し、周囲の音が全く聞こえなくなった。
受付の女性はまだ何かを話していたようだが、その部分は全く聞こえなかった。しばらくすると耳鳴りもおさまり、再び受付の女性の言葉が耳に届いた。
「じゃ、あとは後継ぎの長男だけ？　あたしたちには、絶対に手が届かない人しか残ってないなんて！　そんなの、もう無理じゃないの」
（優貴が結婚する？　あの夏希さんと？　つまり、わたしたちは……もうあの頃には戻れないということなの？　二人は、もう元に戻れない……）
絶望を感じたまさにその瞬間、胸の内に湧き起こったどす黒いものが渦となり、躯中を駆け巡った。
同時に、例えようのない鋭い痛みが千佳に襲いかかる。
「アアアアァァッーーー!!」
お腹全体を両手で包み込むようにしながら、千佳は悲鳴を上げた。渦を巻くどす黒い嫉妬が、おへそ周辺から下腹部へと到達すると、ドロッと温かいものが流れ落ちていった。
痛みに耐え切れず、千佳はその場にうずくまるようにして倒れた。襲いかかる激痛と優貴を失った絶望で、涙が止まらない。
（もう……イヤ。わたし、もう……何も考えたくない）
一条の光さえも見えない闇に引き込まれ、千佳はそのまま意識を放り出そうとしたが、それも叶わなかった。
「ちょっと、あなた！」



千佳がちょうど倒れる瞬間、その場に居合わせた一人の女性が側に走り寄ってきた。
「大丈夫!?　……ちょっとこれって……、そこの受付、救急車を呼んで！　早く！」
「は、はい！」
一瞬でロビーは騒然となる。
「しっかりして、すぐ病院へ連れていってあげるから！」
下半身に、何かがかけられた。スカートから露になった大腿に触れる布の感触にも、千佳は反応できない。
「鈴木さん！　聞こえたら頷いて！　……鈴木さん！」
いきなり頬を叩かれたが、千佳は口を開くことができなかった。頭に靄がかかったような夢うつつの状態で、手足に全く力が入らない。下腹部に走る激痛に、千佳はただ呻くことしかできなかった。
（ああ、助けて……誰か……、優貴！）
時間が経つにつれて、千佳の大腿が濡れていく。
「嘘……、あれ、血？」
貧血か何かで倒れていると思っていた人たちが、急にざわめき始める。普通なら、その慌てように千佳は戸惑いを覚えていただろう。
しかし、千佳に聞こえてくるのは、エコーがかかったようないろいろな人の声。そのせいで、それほど緊迫しているようには聞こえなかった。
バタバタと人が駆け寄る音が響く。

「事件ではないわ！　すぐに清掃員を寄越して、この場を片付けるように指示を！　そして……秘書室に連絡を。鈴木が倒れたので、救急車で運ぶと伝えてちょうだい」
「はい、わかりました」
次は、遠ざかる足音が耳に届く。
「お願い……、もうこれ以上出血はしないで！」
（出血？　わたしが？　……どうして？）
再び激痛が走り、千佳は朦朧としながら身を捩った。
「ううっ……」
誰かが、千佳の首に手を当てている。女性の優しい囁きが耳に届くものの、何を言ってるのかさっぱりわからない。どういった状況なのか頭の中を整理しようと思っても、貧血を起こしたように目が回って何も考えられなかった。
「いったい、何があったの？」
千佳の額を優しく撫でてくれるその感触に、何故か癒しを覚えた。
もっと触れて欲しいと願ったその時、救急車のサイレンが耳に入ってきた。しばらくすると、その音が止まり、ゴムがキュッと鳴る音と共にキャスターが回転する音が聞こえてくる。
「医師の渡辺です。クランケは二十代前半の女性。おそらく……」
（渡辺って……。もしかして、医務室の渡辺女史？）
そこで一瞬渡辺の声が聞こえなくなったが、再び千佳が理解できるぐらいの声が響く。



「出血が酷いので、専門の医師に診ていただけるように手配していただけますか？」
「わかりました」
いきなり千佳の躯が浮き、何かに乗せられた。ガチャガチャという音が聞こえると、再び躯が上に上げられる感覚がする。すると、いきなりそれが動き始めた。振動が躯全体に響き、再び激痛が襲ってくる。
ドアがバタンと閉まる音が何度か聞こえると、いきなりサイレンが鳴った。そこで初めて、千佳は自分が救急車に乗っていることに気付いた。
（助けて……もらえるのね。わたし……）
その時、誰かが千佳の手を握った。
「頑張って！　大丈夫……大丈夫だからね！」
朦朧としていた千佳だったが、暗雲の切れ間から、暖かな陽が射すのがわかった。その光こそ、千佳の手を握ってくれている渡辺女史。千佳はその光を掴むために、力の出ない手でその手を握り返す。
（離してはいけないのよ……。この手を……）
「あともう少しよ……。鈴木さん、頑張って！」
誰かに縋ることができて安心したせいか、千佳はそこで意識を手放した。
それからどれぐらい経ったのだろうか。
突然躯が上下に揺れて、千佳はゆっくりと意識を取り戻し始めた。バタバタと側を走る足音、キ

ャスターが回る音が、再び千佳の耳に届く。
だが、この時も千佳は目を開けることができなかった。下腹部を襲う激痛のせいで、何も考えられない。
そんな千佳の身に、さらに激しい痛みが襲いかかってきた。
（痛ッ！　……わたしの身に、いったい何が起こってるの？　ああ、早く助けて!!）
刃物で切り裂かれるような強い痛みが、千佳に襲いかかる。自由に動かせない躯を捩るように、ただ呻き声を漏らす。
すると、突然遠くから女性の声が聞こえてきた。スピーカーから流れるような、くぐもった母の声も。何を言っているのか、はっきりとはわからない。わかるのは、母の声がいつもと違っているということだけ。
意識が朦朧としているにもかかわらず、遠くの方で話しているその声音が、何故か千佳をとても悲しくさせた。
そう思ってしまうのは何故なのだろうか。
その理由を考える間もなく、千佳は再び眠るように意識を失った。

――数時間後。
まどろみから覚めたくなかった千佳だったが、遠くの方で自分の名を呼ぶ声が聞こえてきた。何度も何度も呼ばれているうちに、自然と意識が覚醒し始める。



同時に、先程とは違う痛みが下腹部だけでなく躯全体を襲った。
（痛い……、躯が痛い！　どうしてこんなに痛いの？）
「千佳？　……目が覚めた？」
意思の力ではどうにもできないほど重たい瞼を、千佳は何度も押し上げようとしては失敗した。それでも励ましてくれる声に助けられ、時間をかけてゆっくりと目を開ける。
「千佳……大丈夫？　具合は？」
その心配そうな声は、母のものだった。何とか焦点を合わせると、千佳の目に髪の乱れた母の姿が飛び込む。母は目を潤ませながら千佳を見つめており、いつもは朗らかに微笑んでいるその口元は強ばっていた。
「……わたし、いったいどうしちゃったの？」
一度瞼を閉じ、カラカラになった口内を何とか潤そうとしたが何故か唾が出てこない。それを訴えるように、千佳はゆっくりと目を開けた。
「喉が、……渇いたわ」
その言葉に、母は水で濡らしたガーゼを千佳の唇に当てる。
（どうして、わたしに水を飲ませてくれないの？　それに、ここはどこ？）
千佳の視界に、白い天井と点滴が飛び込む。消毒液の匂いが鼻腔を擽ったことで、病院のベッドに横になっているのだとわかった。
でも、どうして病院のベッドにいるのだろうか？

「わたし……」
「覚えていない？　会社で倒れてしまったことを」
千佳は、力の入らない手でギュッと拳を作った。
「……覚えて、る。わたし、急に……お腹が痛くなって」
「その場に居合わせた会社のお医者さんが、すぐに救急車を呼んでくださったのよ。だから、千佳はこうして無事なのよ」
（無事？　何が無事だというの？　わたしの身に、いったい何が起こったというの？）
「わたし、どこが悪かったの？　もしかして、盲腸だった？」
頭を少し動かして、枕元にいる母の顔を見つめる。視線が絡まった瞬間、母の目から涙が零れ落ちた。それが何を意味するのか訊きたかったが、千佳はどうしても訊けなかった。母がすぐに涙を拭い、意を決したように千佳の顔をジッと見つめたからだ。
どれぐらい見つめられたのかわからない。何かを見極めようと、母はただ千佳の表情を探ってくる。
「お、母さん？」
張り詰めた緊張に耐え切れなくなり、千佳は母を促すように声をかけた。
「……ちゃんと話すわ。あなたは、きちんとわかるまでそのことばかり考えてしまうと思うから。お医者さんから言われたことを、そのまま話すけれど、自分を見失わずに聞いてね？」
（自分を見失わずに？　……ええ、もちろん！　わたしの躯がいったいどうなったのか。この痛みは、盲腸だったのか。きちんと知りたいもの）



千佳は、ゆっくりと頷いた。下腹部の痛みとはまた違う痛みが今もまだ躯のあちこちを襲っているが、それでも真実が知りたい。
母は深呼吸をすると、点滴をしていない方の千佳の手をギュッと握った。
「千佳はね……救急車で運ばれて、つい三十分前に手術室から病室へ戻ってきたばかりなの」
手術をしたせいでこんなにも躯が痛むのだとわかり、千佳はホッと安堵の息をついた。
「やっぱり、わたし……盲腸、だったのね」
そう呟いた千佳に、母は小さく頭を振った。
「千佳……あなたは妊娠していたのよ」
「妊娠？　わたし、が？」
（まさか……そんなはずはない。だって、だって……わたしは！）
千佳は、母の手を強く握り返した。
「……生理があったのよ？　お母さんも知ってるでしょ？　だから、わたしが妊娠していたはずがないわ」
「でも千佳、毎月きちんとあったわけじゃないでしょ？　生理がない月もあったりと、周期がバラバラだったじゃないの。社会人になる前に、一度お医者さんに相談しに行ったことを忘れた？」
忘れてはいない。毎月生理が来るようにピルを服用しようという話があったが、あまり気にしていなかったから通院も途中でやめてしまった。
「でも、きちんと生理があったわ」

母は、千佳の手の甲をそっと撫でる。
「お医者さんが言うには、その出血は……異変だと知らせてくれてたんですって」
「異変？　異変って何？　わからないわ」
引き攣るような痛みに千佳は顔を歪めながらも、きちんと訊こうと母だけに意識を向ける。
「妊娠していたけれど、それは普通の妊娠ではなかったの。子宮外妊娠だったの」
（子宮外妊娠？　わたしが？）
数年前、まだ高校生だった頃に学校の授業で習ったことがある。本来、受精卵は子宮に着床する。普通はそれで妊娠したことになるが、受精卵が誤って卵管に着床してしまうこともある。そこに着床しても妊娠の兆候が出るので、もし躯の異変に気付いたら早めに診察を受けるようにと、保健体育の先生が言っていた。もし、受精卵が卵管に着床した場合、早急に手術を受けなければならないからと。
忘れかけていた知識を引っ張り出した途端、千佳の唇が震え始めた。
「お母さん、わたしの……卵管は破裂したの？」
「開腹した時、既に卵管は破裂していて……危ない状態だったの」
（つまり、わたしの片方の卵管は……）
「安心しなさい、千佳。もう片方は残ってるのよ。だから、あなたは好きな人の子供を産めるわ。悲観することなんて全くないのよ」
千佳は母を見つめていたが、やがて白い天井へと視線を向けた。



（でも、わたしの生理周期は乱れている。それに、片方だけということは、妊娠しにくくなったことになる）
千佳の唇が、わなわなと震え始める。
「わたし、バチが当たったのかな？　優貴から愛されていたのに、愛想を尽かされるようなことをして彼の愛を失ってしまった。新しい生命を宿していたのに、これもわたしのせいで……」
「それは違うわ、千佳！　子宮外妊娠は、誰のせいでもないのよ」
母の言葉に、何度も心の中で頭を振る。
（母体であるわたしがもっとしっかりしていれば、受精卵は子宮に着床していたかもしれない。そうすれば……優貴との子供を、この腕に抱けたかもしれない！）
「お母さん、……優貴さんに連絡しようか？」
「やめて！　彼には知らせないで。妊娠したことも手術を受けたことも、何一つ言わないで。彼には……知られたくないの」
千佳の目から涙が溢れ、目尻からこめかみへと伝い落ちていく。
今さら優貴に妊娠していたと言っても、どうなるものでもない。大切なタカラを失い、女として傷を負った今、優貴との復縁を望むのはあまりにも不相応すぎる。
それに、優貴には婚約者がいる。千佳が二人の間に割り込んで、彼を奪い返すことはもうできない。
（わたしは決めていたから……。優貴とは、彼が結婚するまでのお付き合いだと）
頭ではわかっているのに、心が千佳の言葉を拒絶する。胸が熱くなり、そのまま張り裂けそうな

ほどだった。
千佳は、優貴を本当に失った。彼との子供まで。強烈なダブルパンチに、千佳は静かに涙を流すことしかできなかった。
「わかったわ。千佳がそう望むのなら……お母さんは何も言わないから」
千佳の心がわかっているのだろうか？
母は千佳を慰めるように、ずっと優しく手を握り締めていた。

＊＊＊

――数時間前の東京、水嶋グループ本社秘書室。
『わたし、優貴を忘れてはいない。今でも、彼のことだけを想ってる。でも、知らない土地で機械のように働いている時に、東京で知り合った茂庭さんと再会したの。彼と話をすることで、少し気分が晴れたわ。わたし、茂庭さんと食事をする約束をしたの。優貴のことばかり考えていると、自分がダメになりそうだから。もちろん他の男性を探すという意味ではないのよ。ただ……わたしが気ばらししたかっただけなの。菜乃さん、こんなのってダメかな？』
「フィフティ・フィフティよね……」
昼食後に千佳から届いたメールを読んだ桜田は、腕を組みながら唸った。
「何がです？」



資料を配ろうと移動していた後輩の永長が、桜田の呟きを聞きつけて背後から訊ねた。問いかけるようにこちらを見てくる永長の瞳を見返しながら、桜田は自分と永長との関係を考えた。
桜田にとって永長は良い後輩で仕事仲間。二人で食事をしたとしても、付き合っている彼氏にきちんと話せば特に問題はない。二人は一度辛い別れを経験したことで、昔よりもさらに強い絆で結ばれているから。
（でも、千佳は違う……）
一人で考え込む桜田に口を出そうとはせず、永長は手に持っていた資料をそっと桜田の机の上に置いてその場を去った。
他の秘書にも同じ資料を手渡している永長を気にすることなく、桜田は目を瞑る。心が極限まで張り詰めているのではと、千佳のことが心配で堪らなかった。
もし、すぐに資料に目を通せば、千佳に連絡することができたのに……

――三時間後。
「ええ？　……ちょっと永長くん、これはいったいどういうことなの!?」
つい数時間前に渡された資料を振りかざして、桜田は永長に向かって大声を出した。
今やっていた仕事の書類を、知らず知らず上に重ねていたので、桜田は今までその資料に気付けなかったのだ。
桜田と永長に先輩たちからの鋭い視線が降り注ぐが、そんなことには構っていられない。

「何ですか？」
永長は手帳を手にして立ち上がると、心配そうに眉をひそめながらこちらに歩いてくる。
「コレよ！」
永長は、桜田が指す部分を覗き込む。それが何かわかると、ホッと息をついて肩の力を抜いた。
「ああ、それですか。午前中、上から回ってきたものをコピーをして、午後一番に配布したものです」
「ご、午前中!?」
「はい」
桜田は、千佳からのメールを読んでいた時に、永長が何かを配っていたことを思い出した。
「こうしてはいられないわ！」
メールで連絡するよりも、直接千佳と話をした方が断然早い。
桜田はすぐに携帯を手に取り、千佳の携帯番号を表示した。千佳が出てくれるのを待とうとした時、〝電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、かかりません……〟というアナウンスが流れる。
電源を切っているのだろうかと思いながらデスクの上に携帯を置くと、次は目の前にある受話器を取り上げて大阪支社の短縮ボタンを押す。
どうか間に合いますように……と祈りながら、桜田はコール音に耳を傾けた。
『水嶋グループ大阪支社です』
（しまった！　直通で秘書室へかければ良かったのに、わたしったら）



思わず舌打ちをしそうになったが、桜田は舌を噛むようにしてそれを押し止める。
「わたくし、本社秘書室の桜田と申します。秘書室の鈴木をお願いします」
『少々お待ちくださいませ』
（早くっ！　早く、繋がって！）
受話器を握り締めながら、桜田は目の前にある資料を凝視した。
〝水嶋優貴氏、本日大阪支社へ立ち寄り……〟
その下には、その業務の関連資料の収集について補足が書かれている。この件に関して何も言われなかったということは、先輩たちが資料をまとめたのだろう。
後輩ができた今でも、桜田にはまだ任せられないということ。もし、任されていたら、すぐにでも千佳に知らせることができただろうに。
自分の不甲斐なさにイライラしていた桜田だったが、そこで意識を受話器から流れてくる音に移した。
そういえば、ずっと保留音が流れている。
（どういうこと？　どうして繋がらないの？）
水嶋グループでは、電話の取り次ぎは迅速にするように言われているので、こんなに待たされることは滅多にない。
何かがおかしい……と思った時、保留音が切れた。
「千佳!?」

『……申し訳ない』
「えっ？」
千佳の声が聞こえると思ったのに、受話器から聞こえてきたのは男性の声だった。
『私は垣本と言います。本社からの電話ということで、鈴木の代わりに出させていただきました』
「あっ、お世話になっております。桜田と申します。以前、鈴木が担当していた仕事の件で訊きたいことがありまして……」
辛い言い訳だとわかっていながらも、桜田はそう告げた。
視線をチラッと上げると、先輩や後輩たちは既に自分の仕事に意識を集中しているようで、こちらには一切注意を払わない。
ただ、永長だけが訝しそうにこちらを見つめている。こっちを見るなと手を振った時、桜田の全身に緊張が走った。
「えっ？　……すみません、もう一度」
『鈴木ですが、本日倒れまして……。そのまま緊急手術をしたそうなんです。しばらく入院すると思うので、東京での仕事の件を訊けるかどうか』
（緊急手術？　会社で千佳が倒れた⁉）
「あのっ！　彼女は大丈夫なんですか！　……入院している病院は？」
『まだ、詳しいことはわからないんです。わかり次第、ご連絡しましょうか？』
「いえ、あの……またこちらから連絡させていただきます。どうもありがとうございました。失礼



いたします」
桜田は丁寧にお礼を言うと、電話を切った。
「どうしたんですか？　鈴木さんに何か？」
尋常ならぬ桜田の態度に、永長が早足で近寄ってきた。桜田は、呆然としたまま彼を見上げる。
「千佳が……倒れたって」
「えっ？」
驚く永長から視線を逸らすと、桜田はデスクの上で両手をしっかりと握り締めた。
（もしかして、千佳は元恋人と会って……乱暴されたとか？　ああ、そうだったらどうしよう！）
額に嫌な汗が浮かぶ。不安を振り払うようにそっと手の甲で汗を拭うと、桜田は永長がデスクの上に置いたプリントにもう一度視線を落とした。
もし、もっと早くに資料を見ていたら、今回の件は防げたかもしれないと後悔を覚えながら……

＊＊＊

――大阪。
搬送された大城総合病院で、千佳は産婦人科の担当医師から子宮外妊娠について説明を受けた。
緩やかに進む下腹部痛、生理とは言い難い不正出血は、卵管流産の危険を知らせる一つの信号だ

ったらしい。生理痛と間違う人もいるので、異変を感じた時点で診察を受けるべきだったと。
（……そうしなかったのは、全てわたしのせいね）
愛し合っていれば妊娠することは有り得るのに、自分に限ってそれはないと思い込んでいた。
もし、早期に発見できていれば、卵管の破裂だけは免れたかもしれないのに。
（赤ちゃんが、わたしに知らせてくれていたのに！）
千佳は、シーツをギュッと握った。
医師曰く、すぐに手術ができたのは本当に運が良かったらしい。もし、子宮外妊娠だと気付かずに病院をたらい回しにされていたら、生命の危険もあったという。
今回は、偶然にもその場に居合わせた渡辺女史のおかげで、スムーズに治療ができたということだった。千佳が流産しているかもしれないと救急隊員に告げ、産婦人科のある病院を指示してくれたらしい。
千佳はそっと下腹部に手を置き、赤ん坊ができた日を計算しようとした。
だが、計算しなくても、優貴に愛されたあの特別な日に命が芽生えたのだとすぐにわかった。彼と最後に愛し合ったのはあの日だし、何といってもあの夜は特別な交わりだったから。
（優貴と名古屋で愛し合った時のことは、今でも忘れられない。お互いを求めて、欲望のまま愛し合ったあの日の二人は、心も躯も一つになっていたもの）
だから、あの日……いつもと違った快感を得たのかもしれない。とても深く、とても神秘的だった二人のセックス。赤ん坊ができたのも頷ける。



（あの時、二人の気持ちは一つになっていた。でも、今の優貴は……もうわたしのことなんて好きでもなんでもない。二人に未来はないのだから、もう潔く優貴を忘れなければ……）
わかっているのに、そう思っただけで気持ちが昂ぶってくる。それを抑えようと、千佳は目の前にあるペットボトルからグラスに水を注いで一口飲んだ。
とにかく、今は優貴のことではなく、退院後にするべきことを考えよう。
まず、赤ん坊の供養をする。腕に抱いてあげることはできなかったが、その魂が再び生を受け、この世に誕生することができるように祈りたかった。
「こんにちは、具合はどう？」
突然、優しい声が病室に響いた。面を上げると、そこには大阪支社の医務室で働く渡辺女史がいた。
「あっ、渡辺女史」
彼女は、支社内では〝女史〟という愛称で呼ばれており、男性社員のみならず女性社員からも好かれている。つい先日、大阪支社で働く男性と結婚したが、仕事場では以前同様旧姓の渡辺で通していた。
「もう、大丈夫です」
水嶋グループは、女性の自立を応援してくれているが、下手に流産の事実を知られると後で大変な思いをするかもしれない。そう思った渡辺女史は、千佳が倒れたその時からずっと気を配ってくれていた。
さらに、産婦人科病棟で入院するはずだった千佳は、術後の経過が順調だということもあり、外

科病棟に移っていた。それも、渡辺女史が担当医師にかけ合ってくれたおかげだった。
もし同じ職場の人たちがお見舞いに来た時、産婦人科では外聞が悪いと考えてくれたのだ。女性ならではのその心配りに、千佳は本当に感謝していた。
「そう？　それなら良かったわ」
渡辺女史はチラッと四人部屋の室内を見渡し、千佳以外の患者がベッドにいないことを確認してから口を開いた。
「秘書室からのお見舞いを持ってきたわ。単なる盲腸だから、見舞う必要はないと言っておいたの。それに女性だから……ガスが出たら恥ずかしいでしょって言ってね」
にこやかに微笑みながら、彼女はテーブルに封筒を置いた。そして、申し訳なさそうにノートパソコンを置く。
それは、千佳が大阪支社に来た初日に支給されたものだった。
「ごめんなさいね。盲腸だったら大丈夫だろうって言われて、コレを渡すように言われたの。もうすぐ退院するっていうのにね。でも、無理な仕事はさせないでと言っておいたから」
「ありがとうございます。わたしなんかのために、いろいろとお気遣いいただいて」
「ううん、いいのよ。わたしの前で倒れたのも……何かの運命だったんでしょうね」
渡辺女史が座ろうとしないので、手で椅子を示して促したが、彼女は残念そうに頭を振った。
「休憩中に抜けてきたから、すぐに会社へ戻らないといけないのよ。ごめんなさいね。でも、また会えるわね。職場へ復帰したら、是非医務室へ立ち寄ってね」



手をポンポンと優しく叩かれる。千佳は感謝を示すようにその手を握った。
「ええ、必ず……。必ず伺います！」
「それじゃね」
渡辺女史は片足を後ろに引いて、入り口の方へ向かおうとした。エレベーターまで送るためにベッドから足を下ろそうとした千佳を見て、渡辺女史は大きく手を左右に振る。
「いいのよ！　入院中は安静にしていた方がいいわ」
朗らかな笑顔で微笑む渡辺女史の言葉に甘えると、千佳はベッドで軽く頭を下げて、その場から彼女を見送った。
病室に一人っきりになると、千佳はすぐにノートパソコンを開いた。大阪に来て以来、桜田とは欠かさずメールの交換をしていたが、千佳が入院してからずっと連絡を取っていない。
きっと、どうしたのかと心配しているだろう。
携帯からも確認はできるが、既に充電が切れており、桜田と連絡の取りようがなかった。母に携帯のアダプタを頼んでも、安静を第一にと言って頭を振るばかり。
途方にくれていた千佳にとって、このノートパソコンはまさに渡りに船だった。
パソコンの電源をオンにすると、すぐメールの受信を行った。予想していたとおり、桜田からのメールがずらりと並んでいる。
桜田には、何があったのか全て話そう。嘘をつけば、きっと悲しそうな表情を浮かべるに違いないから。

（彼女なら、わたしの話を受け止めてくれる。東京で全てを告白した、あの日のように）
千佳は、キーボードにゆっくりと手を置くと、連絡を絶ってから何があったのか、全て吐き出すようにキーを打ち始めた。



## 第二章　心の火を見つめ直して

――東京、水嶋グループ本社秘書室。
千佳が倒れたと知ってから、ずっとメールが途絶えている。できることなら、有給休暇を取って千佳のもとへ駆けつけたかった。
だが、それは叶わなかった。有給休暇届を出そうとした矢先、突然急を要する仕事が秘書室に持ち込まれたからだ。桜田にも仕事が振り分けられ、秘書室は大忙しだった。よほどのことがない限り、有給休暇は取らないようにとお達しが出る始末。
それも全て、千佳の元カレでもある水嶋家の次男が、予定していた資料とは違う書類を求めてきたからだ。
駆けつけてあげられないことを心で詫びながら、桜田は千佳の携帯に電話をかけ続けた。今でも〝電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、かかりません……〟というアナウンスが流れる。それでも、毎日欠かさず連絡を取ろうとしているうちに、五日も経っていた。
（もう一度、大阪支社の秘書室に電話をして、千佳のことを訊こうかな？　でも、前回、電話をかけてから時間が経ちすぎてる。もう仕事を理由には訊けないし……）
千佳のことが心配で堪らなかったが、桜田のメールを見たら千佳の方から必ず連絡をくれると信

じ、毎日メールの返信が届くのを待っていた。
ずっと信じて待ち続けたのが良かったのだろうか。仕事を終えた後、いつもどおりメールソフトの受信ボタンを押すと、待ち望んでいたメールが届いていた。
桜田の願いが、やっと叶った瞬間だった。
「きゃあ！　千佳からやっとメールが届いたわ！」
秘書室に誰もいないのをいいことに、桜田は目を輝かせながら歓声を上げた。
「ほらね！　千佳は、わたしのことを忘れてはいないわ」
笑顔でメールを読み進めていったが、想像を絶するその内容に顔面蒼白になっていく。
「嘘、でしょ？　千佳、が……!?」
千佳が何故手術をしなければならなかったのか、その原因を知った桜田はデスクの上にある電話に手を伸ばした。何が起こったのか教えてくれてはいるものの、千佳の今の状態についてはあまり書かれていないからだ。
携帯の充電が切れているということで、桜田は番号案内に電話をかけ、メールに書かれている大城総合病院の電話番号を教えてもらった。メモに書き留めると、電話を切ってすぐに病院へかける。
『大城総合病院です』
「そちらの外科病棟に、鈴木千佳が入院していると思うんですが」
『少々お待ちください。……はい、確かに入院されていますね。八〇七号室になります』
病室を訊ねたわけではなかったが丁寧に教えてくれたので、桜田はお礼を言うと本題に入った。



「あの……すぐそちらへ向かうことができないんですけれど、鈴木の容体はどうなんでしょうか？」
『申し訳ありません。患者さんの容体は、ご家族以外の方にお話しすることはできないんです』
「でも、鈴木とは同僚で！」
『大変申し訳ありません……』
何を言っても、聞き出すのは無理のようだった。
そこで、次は千佳の家族に連絡をしてみようと思った。受話器を取り上げて、人事部直通のボタンを押す。
呼び出し音が三回鳴ったところで、人事部と繋がった。
『人事部の吉川です』
「秘書室の桜田です。大阪支社へ出向中の鈴木千佳の実家の電話番号を知りたいんですけれど」
『え～と、それは個人情報になるので開示することはできないんです。携帯では連絡が取れないんでしょうか？』
桜田は、目の前のパソコン画面へ視線を向けた。携帯は使えないとメールに書いてあったとおり、千佳から送信されたメールのアドレスは携帯のものではなかった。
「はい……。どうしても無理ですか？」
『仕事上問題が起きて、どうしてもという場合は可能ですが、その際にも上司の判が必要になります。秘書課でいえば、秘書課秘書室室長と秘書課課長の判になりますね』
萎えそうになる気力を押し止めるように、桜田は空いた手で額を押さえた。仕事とは無関係なの

で、上司に判をもらうことは当然無理ということになる。
「そう、ですか……。わかりました。どうもありがとうございました」
受話器をゆっくりと戻すと、桜田は椅子に深く凭れた。椅子の背が大きく軋み、耳ざわりな音が響くものの、そんなことは気にもせず千佳のメールへ視線を向ける。
「ああ、千佳！」
右にも左にも動けないこの状況に、桜田は呻き声を漏らすことしかできなかった。
（千佳が苦しんでいた時、わたしは何もできなかった。次男が指示した資料を集めることに追われていたなんて……）
彼もまた、自分の子供を妊娠した千佳が大変な目に遭ってるとは知らず、役員室の一室で仕事に勤しんでいるのだろう。
倒れた時の状況、千佳の胸の痛み、元カレの態度……。驚愕して手が震えたその内容をもう一度読み直すと、桜田の目に涙が浮かんできた。
（愛し合っていれば、そういう関係になるのも当然。でも、結局はそのリスクは女が背負うことになる。千佳もそう！）
転がっているペンが飛び上がるほど、桜田は力強くデスクを叩いた。
「千佳のことだから、きっと隠れて涙を流しているに決まってる。周囲に迷惑をかけないように、必死に表面を取り繕う子だもの。その千佳が、今こうやって本音を打ちあけてくれてる。ああ……わたしは、友達としていったい何をしてあげられる？」



桜田は、両手で顔を覆った。桜田が今の恋人と一度破局した時は、血の繋がらない叔父が助けになってくれた。
千佳にも、そうやって助けてくれる人が側にいるだろうか？
別れた恋人とのことに他人が首を突っ込むのを、千佳が望んでいるかどうかはわからない。それでも、親友として何とかしてあげたいという気持ちが強かった。
桜田は、メールをジッと見つめる。
「二人はもう終わってる関係。だから……他人が首を突っ込んでもいいんじゃないの？　このメールには、次男は既に別の女性と付き合ってるみたいなことが書いてあるし」
もし、その女性こそ次男の運命の相手なら、辛い思いをさせるかもしれない。
（でも、運命の相手だったら何を言っても関係ないわよね？　結局は、その女性と結ばれる運命なんだもの！）
自分が納得できるように、ただ言葉を並べているだけだとわかっていたが、桜田は千佳のために何かをせずにはいられなかった。
「そうよ。千佳一人が苦しんでいいはずがないわ！　二人がもう別れていて、今は自分の道を進んでいるとしても、千佳にどんなことが起きたのか彼もきちんと知るべきよ」
椅子を蹴るように立ち上がると、桜田は秘書室から飛び出した。誰もいない廊下を走り、勢いを緩めずその先を曲がろうとする。その時、いきなり人が飛び出してきた。
「キャッ！」

ぶつかりそうになると同時に、ヒールが絨毯に引っかかって前につんのめる。
「さ、桜田さん!?」
転びそうになった桜田を支えてくれたのは、後輩の永長だった。
「あっ、ごめんなさい。お先！」
「えっ？　ああ、お疲れさまでした……」
いつもと違う桜田の勢いに驚いたのか、永長は呆然として彼女の後ろ姿を見送った。
だが、その視線に全く気付かない桜田はエレベーターのボタンを押す。
「上って……どこへ行くつもりなんだ？　上の階は、先輩秘書たちしか行ったことのない管理職フロアだよな？」
永長の呟きも耳に入らないまま、桜田は目の前の扉が開くと、すぐにエレベーターに乗り込んだ。目的の階のボタンを押したその時、永長が足早に近寄ってきた。
「どこへ行くんですか！」
「頑張ってくる！　千佳のために……」
桜田は永長に向かって力強く頷いてみせた。それが合図のように、二人の間でエレベーターの扉が閉まった。
「桜田さん、いったい……どうするつもりなんですか？　千佳って……鈴木さんのこと？」
永長の呟きは静かなエレーベーターホールに響いたが、当然桜田の耳には届かなかった。



目的の階に到着した桜田は、一般のフロアとは異なる豪華さに、思わず目を見開いた。緊張を押し隠すように、ゴクッと唾を呑み込む。
「ここが、管理職専用のフロア……」
桜田は、仕事ではまだ一度も足を踏み入れたことがない。仕事とは全く無関係な用事で、息せき切ってここまで上がってくることになろうとは、想像すらしていなかった。
ＩＣチップが埋めこまれたネームプレートを指定の位置にかざし、桜田自身は使ったことのないパスワードをパネルに打ち込む。
（大丈夫！　千佳だって、何度もここを通ったんだから！）
セキュリティを通り抜けると、桜田は前だけを向いて重厚な絨毯の上を歩いた。ドアに付いているネームプレートを、一つ一つ確認しながら歩みを進める。
やっと探していた名前が、桜田の目に飛び込んできた。そこで静かに立ち止まると、数回深呼吸を繰り返し、気持ちが落ち着いたところでドアを四回ノックをする。
「失礼します」
返事を待たずに重たいドアを開けると、桜田は周囲に視線を走らせた。アイランド形式に置かれているデスクに人はいないが、奥へ続くドアの近くに、書類を手に一人佇んでいる男性がいた。
「君は？　アポを受け付けた記憶はないが？」
その人を見下したような態度が、かえって緊張していた桜田を適度に解してくれた。これも全て、いつも傲慢な態度を取る叔父に鍛えられているおかげだろう。怒り肩になっていたが、ほどよく力

が抜けて背筋が綺麗に伸びる。
（これはいい前兆よね？）
少しリラックスできたことに自然と口角が上がったが、桜田はそれを隠すように軽く俯く。
「俺は、君に訊いているんだよ」
戒めるような言い方に、桜田は気を引き締めると面を上げた。明らかに課長クラスよりも良い材質で作られたとわかるデスクへ視線を向け、そこに置いてあるネームプレートを確認する。
「貴方は、アシスタントの……柳原さん、ですね？」
柳原は、訝しげに目を細めて桜田を見つめる。
「次男、いえ、水嶋優貴さん……中にいますか？」
その強気な問いに、彼は桜田の全身を探るように眺める。直立不動でその強い視線を受けながら、桜田は柳原の気が済むまでジッと佇んでいた。彼の目に欲望とかそういうものはなく、探求するような光が宿っていたから耐えられたのかもしれない。
「アポがなければ、彼とは会えない」
その冷たい一言をこの身に受けて、桜田は千佳が受けた悔しい思いを初めて実感した。
彼にとって、桜田はまだ見知らぬ女性だからこの対応は頷ける。
でも、千佳はそれには当てはまらない。次男の恋人を、アシスタントの彼が知らないはずはないのだから。
彼は、こうやって千佳を門前払いにしていたのだろう。



桜田はグッと顎を引くと、動じることなく柳原を真っ直ぐに見つめ返した。
「千佳にしてきたのと同じように、わたしも追い払うんですか！」
そう告げた途端、今まで無表情に近かった柳原の頬の筋肉が動いた。
「千佳……って、もしかして鈴木さんのことか？」
あんな酷い仕打ちをしたくせに、軽々しく〝鈴木さん〟と呼ぶのを聞いて、桜田の中に沸々と怒りが湧いてきた。我慢が限界に達すると、まるで火山が噴火するように、桜田は込み上げる怒りを爆発させた。
「いるんでしょ！　次男が、その中に！」
人差し指を突き出して、奥へ通じるドアを指す。
柳原の前で、桜田のような態度を取る社員はいないのだろうか。桜田の剣幕に呆然とする柳原の隙を狙って、奥へと続く大きなドアに走り寄った。ノックもせずにいきなり重いドアを開けると、隙間から室内へ滑り込んだ。
「きみっ！」
慌てて近寄る柳原の鼻先でドアを閉めると、内側からしっかり鍵をかける。
「何の騒ぎだ」
たった一声なのに、桜田の全身に一瞬で緊張が走った。
ゆっくりと振り返り、奥にいる人物に視線を合わせる。さきほどの部屋のデスクよりもさらに上等なマホガニーのデスクの横で、アタッシュケースに書類を入れている水嶋家の次男がそこにいた。

ネクタイは軽く緩められており、端から見ればリラックスしているように見える。
だが、それは見かけだけだった。千佳の元カレは、侵入者を見ようともせずに、全神経を使ってこちらを拒絶していた。
（一匹狼の叔父のオーラと、少し似てるかもしれない……）
そんな風に思った途端、身を突き刺すようなその拒絶が心地良く思えてきた。ピリピリとした雰囲気であっても臆することなく、叔父と接してきた経験が活かされているのかもしれない。
（志月、ありがとう！）
個性的な叔父に感謝すると、桜田は大きく深呼吸をして次男の姿を睨み付けた。
「大阪へ行って……本社へ戻ってきたと思ったら、また出張ですか？」
桜田は、あえて〝千佳を苦しめに行って戻ってきた〟とは言わなかった。
「……」
彼は何も答えない。何事もなかったかのように、書類を目で追っている。
だが、桜田の言葉は聞こえていたのだろう。流れるような動作で、ゆっくりとデスクに手を伸ばすと、何かボタンを押した。
「柳原、何をしている。不法侵入者だ！」
『すぐに！』
（不法侵入者⁉　わたしが？）
この胸に下げたネームプレートが、見えないのだろうか。きちんと所属部署まで明記されているというのに？
（……そう、見えていないんだわ。だって、この人は、わたしを一度も視界に入れていないのだから）
千佳の元カレは、まるで虫けらのように桜田を扱っている。その悔しさから、桜田はスカートの横でグッと握り拳を作った。
千佳もこんな扱いを受けたのだろうか？
そう思うと、どうにかして彼の気持ちをこちらへ向けさせたくなった。
「こんな男と……千佳は別れて正解だったわ！」
千佳の名を出した途端、彼の肩がピクッと動いた。彼はゆっくりと面を上げて、視線を桜田へと向けた。二人の視線が、火花を散らすようにぶつかった。その瞬間、桜田の躯に戦慄が走った。
まるで、ヘビに睨まれた蛙……
千佳はよくこんな男性と付き合ってこれたものだと、桜田は改めて思った。
もちろん、恋人に見せる表情と、桜田に見せる表情とは丸っきり違うものだろう。それぐらいは、わかっている。それでも、目の前にいる傲慢そうな男性が、心根の優しい千佳と付き合っていたとは、普通なら信じられない。
信じられたのは、千佳の口から嘘は出ないということを知っていたからだ。その千佳が心を寄せた相手だからこそ、彼女の名前を聞いて何か言葉を発して欲しい。
桜田は、次男が口を開くのをジッと待った。
だが、彼は何も行動を起こそうとはせずに、ただ桜田を見つめてくる。

（どうして何も言おうとしないの？　千佳の名を出せば必ず反応を示すと思ったのに。……ううん、それは違う。次男は、千佳の名前に反応した。ただ、次の一歩を踏み出さないだけで）
踏み出さないということは、彼は千佳を心から締め出したということなのだろうか？　希望は、もうないということ？
千佳は、愛する男性との子供を子宮外妊娠という形で失い、さらに片方の卵管まで失った。妊娠に問題はないと言われても、結婚していない女性にとって、それはとても不安なこと。
もし、自分が同じ立場になったらと思うと、桜田の胸の内にいろいろな感情が渦巻き始めた。
愛する男性に側で支えてもらいたい。肩をギュッと抱いて欲しい。愛していると囁いてもらいたい。
だが、千佳はそのどれも与えてもらえない。それをするべき男性は、今桜田の前にいるのだから。
女としての辛さが、桜田の胸を刺す。その痛みに顔を歪めた時、無表情だった彼の頬が微かに動いた。
その瞬間、桜田は次男も心の中で何か葛藤しているのだとわかった。
だが、生まれもった性格が邪魔をして、前に踏み出せないでいるのだろう。
（そうだった。お互い口下手だったから、意思疎通が難しかったと千佳が言っていたじゃないの！　やっぱり、第三者が次男の堅い心に楔を打ち込むしかない）
桜田は意を決し、相手の様子を見ながら慎重に口を開いた。
「貴方は、千佳の裏切りに腹を立てたのかもしれない。千佳が異動を願い出る前に、一言相談して欲しかったのかもしれない。でも、そうできる状況を貴方は作ってあげたんですか？」



彼の頬の筋肉が、微かに動いているのが見て取れる。きっと歯を食い縛っているのだろう。
こちらが放った言葉を理解し、頭の中で何度も反芻しているのがわかった。桜田を見るその瞳には、先程まではなかった生気が漲っている。
「仕事が忙しかった……。男は、そう言えばそれで許されると思っている。済むと思っている。でも、そうじゃないわ。お互いに信頼できる関係を築きたいのなら、時間がなくても相手の性格を知ろうとしなければ」
次男の喉が、唾を呑み込んだ時のように大きく波打った。彼が何か言おうとしたが、桜田は手を前に突き出してそれを拒否する。
「もちろん、それは貴方だけの問題じゃない。千佳だって……そうしなかったのだから。でも、貴方は知っていたのよね？　相談できる友達が誰一人いなかったせいで、千佳はいろいろなことに対して踏みとどまってしまうって。そんな千佳の人生に踏み込んできた男性は……貴方が初めてだったって」
桜田は、大きく息を吸った。次男の躯から発散されている、怒りとも呼べる強いオーラに負けないように。
「初めての恋と初めてのお付き合いで、千佳の心はいっぱいいっぱいだったのよ。千佳は、貴方の側にいられるだけでとても幸せだった。でも、突然家族の大事故を知らされて、千佳はたった一人でそれを抱え込んでしまった。家族のことを恋人に相談してもいいんだって、彼女は知らなかったから！」

彼の目が、大きく見開かれる。
そこで初めて桜田は視線を落とした。彼は、腱が浮き出るほど強く手を握り締めている。ゆっくりと視線を上げて、再び彼の目を見つめた。
このまま次男を追い詰めていいのか、桜田はわからなくなった。
だが、もし仮にここで桜田が言わなければ、彼はいったい誰から千佳のことを聞けるのだろう。
意を決して顎を上げると、怯むことなく彼の目を真っ直ぐに見つめる。
「そんな千佳の悲痛な叫びを、貴方は聞いてあげた？　……もしかして、彼女の言い分を聞こうともせず、勝手に別れを告げてそれで終わりにしたんじゃないの？」
そこまで言った時、彼はいきなり桜田に背を向けた。
「……君には関係のないことだ」
次男の声が掠れている。それは、自分の言動に後悔を覚えているからだろうか？
「そう、わたしには全く関係のない話だった。恋人は誰なのか……千佳が初めてわたしに相談してくれたその日まではね！」
その一言で、再び彼はこちらへと向き直った。
「相談？　……千佳が君に？」
次男の口から〝千佳〟という言葉が初めて出た。もう過ぎ去ったことだ……とは言わない。
（もしかして、千佳はまだ希望を持っていいのかもしれない！）
彼の問いかけには答えず、桜田は言葉を続けた。



「千佳は、自分の気持ちを伝えられないまま、大阪へ行ってしまった。貴方は、恋人として広い心で千佳を受け止めるべきだった。なのに、貴方がしたことはいったい何？　部下に取り次がないよう命令し、あげくの果てに……千佳から逃げるように出張へ行った！」
そこで一息つくと、桜田は肩から力を抜いた。次いで、彼と同じように作っていた握り拳もゆっくり解いていく。
「どちらかが一歩を踏み出せば、こういう結果にはならなかったのに……。とても残念だわ」
軽く俯いて呟いた。
だが、すぐに面を上げて次男を見る。
「千佳は、諦めなかった。貴方とのわだかまりがいつの日か解けると……再び恋人同士に戻れると信じていた。離れ離れになりたくはなかったけど、今は家族のことを思って大阪へ行ったのに、貴方はそこでいったい何をしたの？　千佳が大阪にいると知っていたのに、わざわざ新しい婚約者を侍らせて大阪支社へ行くなんて。……なんて酷い男なの！」
「柳原！　何をしている！　早くこの女をつまみ出せ！」
プライドを傷つけられたからか、次男がいきなり逆上した。
だが、彼が怒りを露にしたことで、桜田も負けじと声を荒らげる。
「男って……、本当に男って！」
地団駄を踏むと同時に後方で音がしたが、桜田は気にすることなく一歩前に出た。
「貴方は、千佳にしたことをまだわかっていないの？　彼女と付き合って、愛し合って、一方的に

別れて、それで終わり？　ばっかじゃないの！　女は、男と別れてもその後も続くのよ。男が蒔いた種をその身に宿してしまった時はね！」
「な、に？」
彼の躯が硬直したように、動かなくなった。
桜田は、何度も心の中で千佳に謝った。千佳の秘密を勝手に明かしていいはずがないのに、どうしても言わずにはいられなかったのだ。
女の苦しみを知ろうとしない千佳の元恋人に、腹が立って仕方がない。
（ゴメン、ゴメン……千佳！）
「千佳の身に起きたことは、最初からもう決まっていて、貴方と別れなくても何も変わらなかったと思う。それでも、もし……ほんの少しだけでも千佳を許してくれていたら、千佳がここまで悲しむことにはならなかったのに！」
「どういう意味だ？　君は、いったい何が言いたいんだ？」
桜田は、次男に向かって指を突きつけた。
「千佳は、大阪へ異動する前から体調がおかしかった。けれど、貴方に別れを告げられてからだったから、精神的なものだと思っていたの。次第に、食べ物すら受けつけなくなっていった千佳は、近々病院へ行こうと思っていた。その矢先、大阪支社で貴方と……貴方にべったり引っついている婚約者の姿を見て絶望した！」
手をゆっくりと躯の脇に下ろすと、まだ動こうとしない彼へ一歩近付く。



「その絶望で、千佳はその場に崩れ落ちて意識を失った！」
――ガタッ！
ドアに何かが当たる音がして、桜田の注意はそちらに向いた。そこには青ざめた顔で、何かを言いたそうにしている柳原がいた。
だが、桜田は次男に視線を戻した。
「千佳は……貴方の子供を宿していたの。でも……それは残念ながら子宮外妊娠だった。緊急手術をして千佳の生命は助かったけれど、女性として大きな傷を負った。わかってるの？　貴方のせいで千佳がどういうことになったのか！　彼女はこの先、妊娠の確率を半分失ってしまったのよ！」
彼の顔から、一気に血の気が引いていくのが見て取れた。
同様に、桜田も顔を青くした。〝妊娠の確率を半分失った〟というのは誇張のしすぎだとわかっている。
だが、妊娠することに問題はないと知ってはいても、片方を失えば誰しもそう思ってしまう。
そのことを初めて口にしたことで、千佳がどれほど悲痛な思いをしているのかやっと桜田にもわかった。
もし逆の立場なら、桜田は泣きじゃくっているだろう。血の繋がらない叔父は優しく慰めてくれ、恋人は〝何も心配しなくてもいい、菜乃の側にいるから〟と抱き締めてくれたに違いない。
でも、千佳には……そうしてくれる人が家族以外には誰もいない！
「千佳は、今回の妊娠で……きれいさっぱり貴方のことを過去の人として封印するみたいよ。希望

はもう持たないと。貴方は貴方で、新しい恋人を作ったのだからって、ね!!」
いつしか、桜田の目から大粒の涙がポロポロ流れ落ちていた。
「どうして一歩踏み出せないの？　燻り続ける心の火を見つめ直せば……きっと」
桜田はそこでグッと言葉を呑み込んだが、溢れる涙を拭おうとはせず、目の前で立ち竦む次男を見つめた。
だが、彼は何も言わない。
この場で彼に詰め寄ってももう無駄だと察すると、桜田は肩を落として踵を返した。
ドアにへばりつくように立っている柳原の側をすり抜けると、逃げるように走り去った。

＊＊＊

あれほどこの部屋から出ていって欲しいと思っていた女性が、疾風の如く去っていった。千佳の身にいったい何があったのか、全てを語って欲しいと思った矢先に。
追いかけようにも、彼女が放った言葉がとても強烈で、優貴はすぐに動けそうもなかった。
不規則なリズムで打ちつける心臓のせいで、思うように息ができない。皺ができるのもお構いなしに、優貴は上着の胸元をギュッと握り締めた。顔を歪めながらも、ゆっくりと深呼吸を繰り返し、頭の中でグルグル渦巻いていることに意識を集中させる。
（千佳が、妊娠していた……。俺の子を？）



優貴は、思わず瞼を閉じた。
しかも普通の妊娠ではなく、子宮外妊娠だったということをなかなか上手く受け入れられない。
優貴は子宮外妊娠について詳しくは知らないが、普通の妊娠ではないことぐらいはわかった。
（千佳は、あの日……俺と会った後に倒れたのか？　そして、緊急手術！）
「柳原！」
意を決してパッと目を開けると、優貴はアシスタントの名を呼んだ。優貴同様に、顔を青ざめさせたまま動けないでいる柳原が視界に飛び込む。
彼は何か言いたげな表情で優貴を見つめるだけで、名前を呼ばれても全く動こうとはしない。
優貴は知らなかった。柳原がスペアキーでドアの鍵を解除をした後、ずっと盗み聞きをしていたことを。それを聞きながら、ある事実を悟ったことを。
「優貴、さん。実は……俺、」
柳原は優貴と同じように一瞬瞼を閉じたが、すぐに目を開けた。ぎこちない動きで、後ろのドアをゆっくりと閉める。完全に二人っきりになると、柳原は怯えたような視線を優貴に向けた。
「実は……大阪支社で、気になったことがあったんです」
優貴は、柳原の言葉を遮りたかった。千佳の身に何が起こったのか、その真実を今すぐ調べるように指示を出し、早く行動を起こさせたかった。
だが、柳原の声音には、優貴でさえ言葉を失うほどの悲痛な思いが込められている。
（何かとんでもないことを知らされる……）

そう思った瞬間、優貴の手も微かに震え出した。止めようにも止められない。とにかくその震えを隠すように腕を組むと、優貴は柳原を見返した。
「それは何だ」
柳原も落ち着かないのか、震える両手を腰の前で握ったり開いたりしている。
「優貴さんが、宝来嬢を連れて大阪支社へ行かれた時……鈴木さんの様子がおかしかったんです。ですが、それは優貴さんと再会したショックからだと……思ってました。約一時間後、会議室を抜け出してコーヒーを頼みに行ったんですが、その時ロビーは騒然としていました。一人の女性が倒れて救急車で運ばれたと。……かなりの出血で床が汚れてしまい、事件があったのではと言ってました。今思えば、その女性こそ、」
「言うな！　……最後まで、言うんじゃない」
その事実を知りたくなかった優貴は、大声を出して柳原の口を止めさせた。
しかし、既にそれが真実だということはわかっていた。わかっていたからこそ、自分以外の人物に、何が起こったのか断定して欲しくなかった。
「……柳原。すぐに、千佳の入院先を調べてくれ」
「……了解しました」
柳原が行動を起こそうとしたその時、突然電話が鳴った。優貴が動こうとしなかったので、柳原はデスクに走り寄って受話器を手に取った。
「アシスタントの柳原です」



優貴は、柳原の応対の声を聞きながら携帯を取り出し、押し慣れた短縮ボタンを押す。千佳の携帯番号が登録されている短縮を、優貴は削除していなかったのだ。
「くそっ！」
案の定、千佳の携帯は電源が切られているのか、通じなかった。優貴が直に千佳と話ができる唯一の手段だったのに、これで道が絶たれてしまった。
優貴は、千佳の両親が現在住んでいる場所や電話番号も知らなかった。付き合っていた時でさえ、千佳に訊こうとしなかった。
優貴が知っているのは、千佳が大阪へ行ってしまったという事実だけ。
先程の女性が放った言葉が、再び優貴の胸を刺す。
（本当にバカだ！　俺が、千佳に求めてきたのは愛だった。だが、俺は千佳に何を捧げた？　何も、ない。……何も！）
そもそも、優貴は千佳を強姦して手に入れた。その関係が恋人へと変わり、心を通い合わせるようになった。共に過ごせる喜びを味わった。
二人の関係は、たったそれだけだった……
優貴が思っていた愛とは、ただの支配欲と独占欲のみ。本当に〝愛する〟ということを知っていれば、千佳の悩みやちょっとした変化を感じられたはずなのに、優貴がしたのはドロドロとした醜い嫉妬を吐き出すことだけ。
（俺は、なんてことをしたんだ！　とにかく千佳に会って……）

「優貴さん」
柳原に呼ばれ、優貴は苛立ちながら振り返った。
「何だ！」
「至急、名古屋へ」
「何⁉」
思ってもみなかった言葉に、優貴は訊ね返した。そんな優貴に、柳原は言葉を続ける。
「ＨＫコーポレーションの書類から不正が発覚したそうです。詳しい内容は不明なんですが、着工を遅らせると膨大な額の被害が出てしまいます。すぐあちらに出向いて、状況を把握した方が」
「……くそっ！」
すぐにでも大阪へ行き、千佳のもとに駆けつけたい。なのに、頭は仕事モードに切り替わり、早く名古屋に出向いて、不正内容を確かめろと命令してくる。
相反する気持ちに、一層優貴のイライラが募った。
水嶋の名を背負っているからこそ、仕事で失敗するわけにはいかない。この仕事を任せるのはまだ早すぎたと思われてはならない。会長や社長だけでなく、役員たちからも認めてもらうには、この仕事を放り出すわけにはいかない。
身を切られる思いで、優貴は決断を下した。
「……すぐに社を出る。不正の内容は俺が確認するから、柳原は千佳のことを」
「もちろんです！」



柳原は、タクシーを呼ぶために電話をかける。優貴は、デスクの上に散らばった書類を簡単にまとめた。それらを引き出しの中に入れると、そこに置いてあった一つの小さな箱を手に取って、素早く鍵を閉める。
（すまない、千佳……。すぐに行くことができなくて、本当にすまない。終わったら、すぐにお前のもとへ行くから、それまではどうか……待っていてくれ！）
小さな箱をとりあえずポケットに入れると、優貴は爆弾を落とされる前から用意していたアタッシュケースを手にした。
「よし、行くぞ！」
優貴の号令に頷く柳原と共に、急いで執務室を後にした。社を出ると、既に待っていたタクシーに飛び乗り、東京駅へと向かった。

＊＊＊

千佳の元カレとアシスタントが慌てて出ていく姿を、桜田は玄関ホールで見ていた。その慌てぶりから、やっと行動を起こして千佳のもとへ走ったのだと思った。
「良かった……。あとは、千佳が心を開いてくれれば」
千佳が送ってくれたメールの一文が、桜田の脳裏に浮かぶ。
『彼とやり直す機会があったとしても、わたしはもう彼とは付き合えない。彼に、子供を産んであ

げられないかもしれないもの。馬鹿ね、彼からプロポーズされたわけでもないのに。……菜乃さん、わたし大丈夫よ。前を向いて歩き出さなければいけないって、やっと気付いたから。優貴とは縁がなかったと、やっとわかったから……』

桜田は、激しく頭を振った。

「違う、そうじゃない！」

（女として、子供を産めることは大切なことかもしれない。けれど、それを決めるのは千佳ではなく彼なのよ。千佳、お願い……全てを諦めようとしないで。前を向くことは大事だけど、間違った方向へ無理やり進もうとはしないで）

携帯を取り出すと、千佳へのメールを打ち始めた。長い長い文章を打ち終え、それを送信すると携帯を愛おしそうに胸に押し当てる。

何故か、無性に涙腺が緩んでくる。溢れてくる涙を拭おうともせず、桜田はその場に立ち尽くして、ビルの谷間に見える月を見上げていた。



立ち読みサンプルはここまで

## 第三章　先が見えぬまま

〝彼とやり直す機会があったとしても、わたしはもう彼とは付き合えない〟

桜田にそう告げたことは、本心だった。

全てゼロに戻して、新しいスタートを切る。それが自分にとって一番いいことだと思った。

（子宮外妊娠という悲運に見舞われたけど、優貴の子供をほんの少しの間だけでも……この身に宿すことができた。わたしは、それで幸せだわ……）

優貴のことは、今日を境にもう忘れることにしよう。夢に描いていた楽園は、儚く消え去ってしまったから。

それに、彼にはフィアンセがいる！

＊＊＊

千佳が退院してから、五日目。会社には子宮外妊娠とは報告していないので、週明けにはもう復職しなければならない。

だが、まだ引き攣るような痛みがある。徐々に痛まなくなると医師に言われたが、千佳には当て